No.38
2007 | Autumn

岡山大学 Okayama University
埋蔵文化財調査研究センター報
Archaeological research center Center report

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
20年の発掘成果展

「自然と人間、地中に埋もれた命の対話」
岡山市デジタルミュージアムで開催

2007年は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター設立20周年の年―当センターは、前身の埋蔵文化財調査室（1983年3月設立）から1987年11月の改組によってうまれて、今年で20年目をむかえます。

それを記念して、去る2007年6月5日～17日の間、当センターと岡山市デジタルミュージアムが主催となって、発掘成果展「自然と人間、地中に埋もれた命の対話」ならびに記念講演会を同ミュージアムにて開催しました。これまでも、当センターでは、調査成果の普及活動の一環で、岡山大学構内において定期的に展示会や各種催しを行ってきました。しかし大学の外で、かつこうした大規模な会場での開催は、はじめての経験でした。おかげさまで、期間中には2,161名の方に会場に足を運んでいただき、盛会のうち無事終了することができました。

今回の記念事業では、「自然と人間」をテーマにかかげました。展示では、岡山大学構内遺跡の調査研究成果をもとにした、縄文時代から近代にいたる自然と人間の関係史を軸としました。また本学の各部局にご支援いただいた、自然と人間に関する最先端の研究を紹介するコーナーや、土器の組み立て等のワークショップコーナーも設けました。記念講演会としては、6月10日に「鹿田、古代・中世のにぎわい」、17日に「津島、自然のなかの縄文人」と題して実施しました。千葉喬三岡山大学長の特別講演をはじめとする多彩なプログラムで、両日とも大いににぎわいました。

本号では、記念事業のもようを、みなさまにいちはやくお伝えしたいと思います。（光本　順）

展示解説のひとコマ

記念講演会の開催

展示会期間中の6月10日および最終日となる17日の計二日間、記念講演会を岡山市デジタルミュージアム講義室において開催しました。

一日目は、社会文化科学研究科の久野修義先生や岡山市教育委員会の草原孝典主任をお迎えして、鹿田遺跡の古代・中世に関する最新の研究成果が披露されました。

二日目は、縄文時代の津島岡大遺跡をテーマとします。千葉喬三岡山大学長による特別講演にはじまり、環境理工学部長の沖陽子先生ほかの講演によって、自然のなかの縄文人の暮らしぶりが多角的に明らかにされました。

講演会プログラム

記念講演会1 『鹿田、古代・中世のにぎわい』 2007年6月10日
「古代・中世鹿田の土地区画」 山本 悦世
「猿形木製品とくぐつまわし」 岩崎 志保
「井戸と曲げ物」 光本 順
「新道遺跡の発掘調査」 草原 孝典
「摂関家領鹿田庄と鹿田遺跡調査の課題」 久野 修義

記念講演会2 『津島、自然のなかの縄文人』 2007年6月17日
特別講演 「自然の循環と人間の暮らし」 千葉 喬三
「津島岡大遺跡の縄文人」 野崎 貴博
「種子から見た縄文風景」 沖 陽子
「縄文人の生活と津島岡大遺跡調査の課題」 稲田 孝司

講演会 1 「鹿田、古代・中世のにぎわい」

ダイジェスト

◆草原 孝典 岡山市教育委員会文化財課主任 「新道遺跡の発掘調査」

岡山市新道遺跡は、鹿田遺跡の東側、旭川の西岸の自然堤防上に位置します。1998年に岡山市教育委員会が発掘調査を行いました。鹿田庄は、岡山大学鹿田キャンパス内だけでなく、その周辺も荘園の範囲であることは、絵図などの研究から以前より予想されてきたことですが、鹿田庄に関連する木簡が出土した本遺跡の調査によって、荘園の広がりを初めて遺跡から明らかにすることができました。

新道遺跡では、12世紀後半の井戸や建物がみつかっています。発見された井戸は掘り形が約4mある、非常に大きな規模のものです。井戸枠の中からは、完形品のお椀が42個も出土しており、重なって埋没しているものもありました。井戸廃絶時に意識的に投棄されたものと考えられます。お椀のほかに木簡が3点出土しました。木簡のひとつには、「…御庄久延弁」と記されており、これは庄家へ運ばれた年貢に付けられた荷札と考えられます。また、井戸よりも南側には遺構が全く認められない空間があることから、一般的な集落の様相とは異なっています。これらのことは、12世紀後半に限定すると、新道遺跡の周辺が、鹿田庄の中心のひとつになっていたことを示していると推測されます。また新道遺跡の内容と鹿田遺跡の内容とを比較することにより、荘園の中心が時期により移動するのか、もしくは複数存在したのかなど、荘園の構造を考古学的に解明できる可能性があることを示唆しているといえます。

殿下渡領には、鹿田庄を含めて4箇所あります。鹿田庄以外の殿下渡領（大和国佐保殿、越前国方上庄、河内国楠葉牧）の立地をみると、それぞれ政治的・経済的な要衝を押さえる位置にあります。おそらく、鹿田庄の設定の背景についても、瀬戸内海航路の中央に位置するという交通拠点をおさえることが目的であったのではないかと推測しています。

◆久野 修義 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 「摂関家領鹿田庄と鹿田遺跡調査の課題」

鹿田庄は、藤原氏の氏長者によって代々受け継がれた、4つの殿下渡領のひとつです。「庄牧渡文」（寛仁元1017）は、藤原道長から頼通に引き継がれた際に作成された文書ですが、ここに4つの荘園（佐保殿、鹿田庄、方上庄、楠葉牧）が記されています。11世紀はじめには、殿下渡領としての4箇所が成立していたことがわかります。

鹿田庄は、藤原内麻呂の遺領としてはじまり、その後、藤原氏北家の伸張と軌を一にして展開したことがわかります。藤原氏は、平氏との姻戚関係のなかで荘園の所管が平氏に移る際にも、鹿田庄を含む殿下渡領については手放しませんでした。それほど重要な荘園であったということです。

寛和の鹿田庄事件（985-986）の記事には、10世紀末の鹿田庄に倉庫群や320石の地子米、庄司や寄人らの居宅が300余りあったことが記されており、鹿田のにぎわいをよく示しています。

鹿田庄の発展には、恵まれた水運がかかわっていたようです。鹿田庄には、梶取（高位の船頭、航海長）が居住し、鹿田庄の荘官である別当が所有する大型船を借りて瀬戸内の塩や美作の米を大和まで運んだ記事（長徳四年998）があります。旭川から瀬戸内海をつたって淀の方まで行くルートが想定されます。

鹿田遺跡の発掘調査は、文献ではわからない荘園の実態を教えてくれます。これからも発掘調査を持続していくとともに、市街地の荘園遺跡として、大学や岡山県・市教育委員会といった調査主体の違いを超えた協力体制によって、ますます鹿田庄の調査研究が進展することを期待します。

講演会 2

「津島、自然のなかの縄文人」

ダイジェスト

◆特別講演　千葉 喬三　岡山大学長　「自然の循環と人間の暮らし」

これからの私たちの生活を考える上でのキーワードは、「循環」です。なぜ「循環」なのか。

地球を特徴づけるのは、水の存在です。約40億年前に偶然うまれた原始の海によって、原初的な生物は誕生しました。生物には、自分と同じものを複製する力と同時に、環境にあわせて自分とは少し異なるものをうみだす力がそなわっています。この力によって、地球には3,000万種は下らないほどの多様な生物が生息することになったのです。

生物には、3つの種類があります。すなわち、①生産者（無機物を有機物に変える）、②消費者（有機物を食べる）、そして ③分解者（生産者と消費者の遺体を食べて無機物をつくる）です。これら三者によって生物の循環がうまれています。循環で重要なのは、ゴミがでないこと。それに対して人間の世界は、生産者と消費者からなる二元的世界、つまりゴミの問題が発生するのです。人間の世界は、生物が40億年をかけて築いた合理的なシステムに比べると不完全です。まだまだ生物の世界に学ぶ必要があります。

人間は、消費者の一種として、生物の世界で最後に誕生しました。人類の歴史は、生物のそれと比べるとごくわずかです。人間が他の生物の世界から離脱したのは、農業の開始によるものと考えます。日本でいえば、縄文時代のことです。農業によって、人間は余剰生産物をつくり、生物の世界をコントロールしながら文明を築きました。農業の延長上に、化石燃料からエネルギーをつくる産業が誕生します。

こうした人間の世界は、生物の循環構造と地球の物理的環境に大きな影響を及ぼしてきました。地球温暖化の問題は、生物の循環システムでは維持できない量の炭酸ガスが、化石燃料を燃やして排出されることによります。生物の循環システムを維持するための方法を、これからの私たちは真剣に考えていかなければなりません。

では私たちに何が出来るのか?たとえば、日頃使う電気を5%節約すること、これは意識さえすればとても簡単なことです。それが世界規模で実現できれば、地球温暖化問題の大きな改善につながります。大切なのは、新たな価値観を創出すること。生物の世界から離脱した私たち人間には、その能力とともに責務があるのです。自然を巧みに利用しながら生きてきた、縄文人を先祖にもつ日本には、環境立国として世界に貢献していくことのできる資質があるのです。

◆沖　陽子　岡山大学環境理工学部長　「種子から見た縄文風景」

人類が洞窟から出てキャンプ生活に入ると、周辺に裸地が増え、本来の山野草は衰退し、裸地に適応した植物群が生えるようになります。これが人里植物です。人類は、この人里植物群のなかから選抜して作物を生み出しました。作物の成立にともなって生まれたのが雑草です。

津島岡大遺跡からは、縄文時代の貯蔵穴が10基（後期7基・晩期3基）みつかっています。貯蔵穴に含まれる種子を抽出すると、37科59属が確認できました。食利用に供したと考えられる草本類や木本類以外に、人里植物や田畑共通雑草が多く出土しています。さらに水辺・水田雑草も確認できます。種子の出土傾向をみると、後期と晩期で貯蔵穴周辺域の植生や貯蔵穴を埋めた季節に変化がうかがえること、そして後期・晩期を通じて耕地が広がっていったことが推測されます。また、栽培植物の種子の存在から、畑地が広がっていたことや、人里植物・畑地雑草の割合の高さから、湿田ではなく乾田的な耕地が広がっていたのではないかと推測できます。

ところで、日本における水田雑草の原産地を調べると、東アジアや東南アジア産のものが多いことがわかります。このことは、水稲と水田雑草がセットになって渡来したことを物語ります。こうした水田雑草は有史以前に帰化したものですが、一方で江戸時代末期以降に帰化した新帰化植物とは区別され、現在の植生の自生種に位置づけられています。2005年6月に施行された「外来生物法」では意図的に導入された新帰化植物が外来種として規制の対象となりますが、歴史的視点から外来種と自生種の区分について考えてみることもおもしろいでしょう。

縄文人は、狩猟生活と小規模な農耕形態を維持していたものと推測されます。自然のめぐみの享受と自然の持続性を保つ術を心得ていたのでしょう。またそれは、自然への畏敬の念に後押しされていたものと考えられます。21世紀に生きる私たちは、縄文風景を彷彿させる種子と対話することにより、縄文時代の命を呼び戻してみることも大切なことではないでしょうか。

20年の発掘成果展の開催

2007年6月5日～17日　岡山市デジタルミュージアム　4階企画展示室

20年の発掘成果展のタイトル・テーマは「自然と人間、地中に埋もれた命の対話」。岡山大学構内遺跡の調査研究成果を中心に、5つの展示コーナーとワークショップを設けて展示をおこないました。テーマに沿った歴史のイメージを、わかりやすく伝えるにはどうすればいいか？ 約700㎡の広い展示スペースを存分に活用し、弥生時代の水田や平安時代の井戸・建物などを床面をつかって実物大に復元した展示や、大型の復元イラストの作成など、これまでの展示経験をいかしつつ知恵をしぼりました。おかげさまで、アンケート結果をみると、どのコーナーも関心が高く、ご意見・感想もたくさん寄せられました。

①水とめぐみ
採集から農耕へ。
縄文時代・弥生時代
に変化していく、
自然と人間の関係。

⑤自然と人間、21世紀の岡山大学
自然と人間の共生に関する岡山大学の
多様な研究成果を紹介。
ワークショップコーナーでは
土器の組み立てなどを体験。

②心といのり
縄文人・弥生人のこころ、
自然への畏敬の念。

コンセプト
自然と人間

③荘園の世界
平安～鎌倉時代の
「鹿田庄」にみる土地の
大改造の歴史。
荘園のにぎわいを示す
品々。

④戦いと人びと
原始～近代までの戦いの歴史。大学構内にのこる戦跡に注目。

発掘調査のお知らせ

2007年8月1日より、津島岡大遺跡第30次調査（インキュベーションセンター新営）を実施しています。調査地点は、薬学部建物の西側に位置します。12月ごろまで見学できます。

また2007年10月より鹿田遺跡第18次調査（中央診療棟ほか新営）を行います。2008年3月までの調査予定です。調査地点は、新南病棟の北側です。ぜひお立ち寄り下さい。

編集後記

今号は、先に行われた当センター20周年記念事業の特集号としました。展示会や講演会の雰囲気が、少しでもお伝えできれば幸いです。今号掲載の講演要旨の作成にあたっては、講演者のみなさまに御協力いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。（光本　順）

■編集発行／岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

〒700-8530 岡山市津島中3丁目1番1号　TEL・FAX（086）251-7290
［ホームページ］http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html

2007年10月22日　発行